

障害を越えゆく「高瀬舟」

——『和泉式部日記』の紅葉狩をめぐる贈答歌の指向——

副島和泉

一、「高瀬舟」の贈答歌

木の葉の色付く頃、帥宮は女を紅葉狩へと誘った。それまでは、「檀の紅葉」を折らせた枝を手に恋の深まりを確かめ合っていたが、次にふたりが試みたことは、実際に「紅葉狩」へと赴き、それを味わうことであった。しかし、約束の日に「物忌」で女が家に留まったため、迎えに訪れた宮は泣く泣く引き返し、紅葉狩は延期になってしまう。それを「口惜しく」思うふたりは、歌を贈答しながら次の機会を待ち望んでいた。以下は、その後の展開を描いた場面である。

ひと日、おはしましたりしに、(女)「さはることありて、聞こえさせぬぞ」と申ししを思し出でて、

(女)「高瀬舟」はや漕ぎ出でよさはることさしかへりにし蘆間分けたり

と聞こえたるを、(宮)「思し忘れたるにや、

山べにも車に乗りて行くべきに高瀬舟はいかが寄すべき」

とあれば、

(女)紅葉葉の見にくるまでも散らざらば高瀬舟のなにか漕がれん

とて。その日も暮れぬればおはしまして、こなたのふたがれば、忍びて率ておはします。
〔和泉式部日記〕六三頁^②

「高瀬舟」に譬えられた宮は、女から「物忌」が明けたことを告げられ、早く自分のもとへ来て欲しいと誘われるが、そもそも「さはること」があつて逢えないと言っていたのは女の方であつたことを思い出す。その上「さしかへりにし」と、あたかもこちらの都合で引き返したかのような詠みぶりをしてしていることにも困惑を示し、「思し忘れたるにや」という一言を添えて「山べにも」の返歌をする。ところが女は、宮が「高瀬の舟はいかがよすべき」と詠んでいるのに対し、「高瀬の舟のなにか漕がれん」と粘りづよく、彼の訪れを請うような思いを詠んで返している。

そうして宮は、その日の暮れに女のもとを訪れているが、この「高瀬舟」を扱った贈答歌からは、ふたりの心通う様相はみえてこない。しかし、表面にはあらわれない何らかの合意がなされて、ふたりを逢瀬にいらしたようである。

当該場面を、いまここでは私による校訂本文によって掲げてみたが、従来、この場面は、「思し出でて」、「思し忘れたるにや」など、「思す」の連続が見て取れるように、相手を思う女と宮のどちらの心中に寄り添って読み進めていけばいいのか、あるいは、どちらを

その主体とすればいいのかという、読み手の混乱を招いている複雑な入れ子構造を抱えた文脈を解くことに、その主眼が置かれてきた。例えば、『日記』を歌物語的な手法として捉える小町谷照彦氏の論や、こうした現象を歌文融合とする佐藤和喜氏の論などである。

また、諸注釈書を総覧してみてもほぼ全てが異なる解釈を示し、その一環として、「高瀬舟」の贈答歌も問題視され、歌の贈答関係においても相違が見られるほか、詠者を逆転させて理解しようとする論も掲げられてきた。その中でも、新潮日本古典集成本は、点線部「申しし」の語法の不審を指摘した上で、「さはることありて、聞こえさせぬぞ」の箇所は、宮が重たちの会話を耳に挟んだものとするなど、「高瀬舟」の贈答歌が詠まれた経緯を独自の考証で導く。そして、「高瀬舟」が前例に乏しい歌材であり、『日記』以降に頻出するようになったことから、どのような経緯で詠み込まれたのかということも注目されてきた。それは、柿本人麻呂の作とされる、

湊入りの蘆分け小舟 さはり多みわが思ふ君に逢はぬ頃かな

〔人丸集〕二二二／『萬葉集』卷十一・二七四五／

〔拾遺集〕恋・八五三・人麿

という、恋の障害を「蘆」に、そして障害をかき分けて女のもとを訪れる男を「蘆分け小舟」に譬えた歌が参考歌として挙げられた。この歌を基盤に、『日記』では、「蘆分け小舟」を「高瀬舟」に変型させたのではないかという指摘であった。

『日記』に同じく、「さはりおほみ」や「さはりおほかる」などの語とともに詠み込まれた平安朝の歌をみると、恋人との逢瀬の困難な模様を贈答したものや、母が息子の船旅の苦難を案じて詠出したもの、また、斎宮が俗世との接触の難しさの感傷に浸ったもの

など多岐に渡っており、やはり人麻呂の詠歌をもとに、それぞれの境遇に応じて「蘆」や「舟」が多用されていたことがわかる。その中でも、『日記』はそれを「高瀬舟」としているために、特殊な例とされていた。

しかしながら、そこで木村正中氏は異なる見解を加え、「蘆間を分けていく高瀬舟は、ようやく障害がなくなつて恋しい人に逢いにいく男の姿」に相応しい歌語であるからこそ、女は宮の譬喩に用いたと結論づけた。確かに、木村氏の提言を念頭に和泉式部の「蘆」と「舟」を詠み込んだ歌をみると、「我が身」の上を悲観したものや、恋人への皮肉をうったえるなど、同時代のものとは異なる詠み方をしてることがわかる。そうした中でも殊に「高瀬舟」の詠歌のみ、男の訪れを誘うような、他の「舟」の詠歌との相違が窺えるのである。ならばその船に、特別な思いがあったものと考えていいであろう。

それでもなお疑問が残るのは、宮の返歌で詠まれた「高瀬の舟」の意味である。彼の歌には、木村氏が提示されたような「障碍がなくなつて恋しい人に逢いにいく男の姿」を自覚したようなものは見受けられず、明らかに女の歌に戸惑っているといった感がある。にも関わらず、その後の女の歌を受け取り、宮は何かを悟つたかのよう訪れているのであつた。いったい、ふたりの間では、「高瀬舟」がどのような鍵語として働いていたのか。まずは、他に散見する「高瀬舟」の詠歌から、その表現性を窺つてみたい。

二、和歌の中の「高瀬舟」

「高瀬舟」が詠み込まれた歌は、新古今歌人のものに多く、その他仏典が織り込まれたものや天皇を偲ぶ百首歌で扱われるなど、特に中世に広がりを見せていくが、ここではそうした例は除き、平安後期までの歌を扱うことにする。

そこではじめに目を引くことは、「高瀬舟」を詠んだ歌人たちの顔ぶれである。例えば、相模や赤染衛門、曾禰好忠²²といった、和泉式部と親交が深く、詠歌に影響関係のある人物たちの歌に、「高瀬舟」、あるいは「高瀬」の語が用いられている。それはつまり、和泉式部の詠作環境を「高瀬舟」の語からも示しているといえる。そして次に、「蘆」や「水」などととも詠み込まれている歌が、『金葉集』や他の私家集などにあることも注視され、「高瀬舟」は、『和泉式部日記』と同様、「さはり」や「障害」などの中にある進みづらい所にならずむ船であることがわかる。

その中でも、この『相模集』の歌は、やや異なる例である。

日ごろおとせぬ人のわづらふころ、見すてがたうとてお
こせたるさまに、言ひしかば

まことにや葦のうら葉もみだるらむ **高瀬の小舟** さはりあ
るまで **〔相模集〕** 一一六

これは病気を患っていた夫公資に相模が見舞いの文を出し、その返事の中にあつた歌である。ここに「高瀬の小舟」の語が詠み込まれており、夫は自身をそれに準えているが、「高瀬舟」が通れないほどあなたの周囲には「さはり」があるのかと、妻の浮気を疑つたものである。なおかつ、これは『和泉式部日記』の贈答歌を本歌と

し、自分たちの夫婦関係に転じている歌として重視される。²³

また、『経信集』を窺うと「旅情」を詠出したものに登場し、「高瀬舟」は「天の川」という観念上の地まで漕いでいく乗り物として用いられ、目的地まで辿り着くまでの苦心を詠み込む際の、効果的な歌語として機能している。その他、景情を詠出するときに、「山吹」の香りの中で進み行く「高瀬舟」が表現される例もある。²⁴

そうした中で、次に挙げる『赤染衛門集』や『定頼集』は、「高瀬舟」に待ち人の到来を詠み込んだ例であり、少し目を凝らしてみたい歌である。

大井川に舟の漕ぎ渡るを見て

雨やまぬかげをば渡る **高瀬舟** をちかた人の来るかとぞ待つ

〔赤染衛門集〕 三三三

八幡にまうで給ひて、きのもとにとまりたまうて、こさ
むといふくぐつまはし呼びにやり給ひけるに、おそくま
わりければ

高瀬舟 つれてこさむを待つほどに

とあれば、弁の君

やがて岸にもかくれぬるかな **〔四条中納言定頼集〕** 三九二

赤染衛門の歌は、降り止まない「雨」の中で、「大井川」に漕ぎ渡る「高瀬舟」の「かげ」を見て、臆な船に「をちかた人」が乗っているのではないかという期待を詠み込んでいる。同様に、人を待つことを詠んだ例として『定頼集』であるが、その内実は全く異なり、石清水八幡宮へ参詣の後、近くの木本に泊まり、「高瀬舟」に乗りながら「こさむ」という名の「くぐつまはし」の女性を待つ、定頼親子の期待と失望が表出されている。

このように、「高瀬舟」はさまざまな場面で詠まれ、その多彩な表現性が認められるのであるが、特に赤染衛門らが詠出した「高瀬舟」が、待ち人を請うようなときの歌語として用いられていることに留意したい。すなわち、こうした歌は、「高瀬舟」が待ち人のもとを訪れてその人とともに乗る船として、また待ち人の到来を叶えるような乗り物として認識されていたという側面をみせていることになるのである。

それを踏まえてみると、『源氏物語』の橋姫巻で詠まれた薫の歌の中にみえる「高瀬」の語はどうであろうか。

(薫) 橋姫の心を汲みて **高瀬** さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる
(大君) さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしはつら
ん

(小学館『新編日本古典文学全集 源氏物語⑤』)

橋姫、一四九頁より抜粋)

薫は、自分を待っているであろう大君を「宇治の橋姫」に準えて、船の「棹」をさして懸命に訪れるかのごとくその境地を詠み、「はかない」身の上の共感を彼女に求めようとする。それを受け取った大君は、「さしかへる」の歌で、薫に宇治川を行き来する渡し守を重ね合わせ、彼を迎え、そして見送る胸の内をそつと潜ませるのであった。

ここで、先述した「高瀬」の語に着目すると、「浅瀬」という注記が多い中、古くは『浮木』に「たかせは小舟の名也」と、「高瀬舟」を仄めかす記述があり、『岷江入楚』の「箋曰」には、薫が歌の中で「棹のしづくに袖」が「濡れ」と詠んだ所以を、当時の「高瀬舟」の構造と歌ことばの意味から説いている指摘がある。その他『萬

水一露』、『湖月抄』の「師説」にも、「高瀬舟」の注が掲げられている。つまり、このような指摘を鑑みれば、「高瀬」を「高瀬舟」としてその歌意を捉えることによつて、「宇治の橋姫」伝説を裏付けるかのごとく、よりいつそう薫を「待つ女」としての大君の姿を彷彿とさせることになるのである。

では、このように人々に詠み込まれた「高瀬舟」とはいかなる船なのか。そしてそれは、当時どのような用途で使われていた船なのだろうか。『和泉式部日記』に立ち返ってみると、女はあえて新奇な歌材であるその船を選んで宮へ歌を詠んでいた。なぜ、「高瀬舟」でなければならなかったのか。次節は、「高瀬舟」の実態を洗い、この船のどこに人々の共感を誘う歌語としての要素があったのかを明らかにしたい。

三、「高瀬舟」の実体

『倭名類聚抄』をみると、「高瀬舟」は小さく底の深い舟と記されている。そして、『日記』以前に現存する「高瀬舟」の史料が、この『三代実録』の光孝天皇の時代の記事である。

元慶八年(八八四年)九月十六日条

○十六日癸酉、令近江丹波兩國、各造 **高瀬舟** 三艘、其二艘長三丈一尺、廣五尺、二艘長二丈一尺、廣五尺、二艘長二丈、廣三尺、送神泉苑

(『新訂増補国史大系』吉川弘文館、一九六六年、五七二頁)

ここでは、「高瀬舟」の大きさや製造した場所などが明らかにされ、神泉苑に送ったということが記されている。そして、この時世にそ

れまで途絶えていたとされる神泉苑での行幸が復活したということ
は、太田静六氏の研究で詳細が明らかにされているが、その中でも
特に天皇が釣を愛好していたということを踏まえると、ここに「高
瀬舟」と船の種類が明記されている点は重視されよう。

さて、この後「高瀬舟」の記事が見られるのが、九条家本『延喜
式』の巻十二に裏書きされた以下の文書である。

九条家本『延喜式』巻十二裏文書・長元四年（一〇三二年）一
月二十三日条

〇五一七 右衛門府解

東 高瀬舟 八艘可闕怠供御不安愁□（状カ）

副進宣旨案文

右得預等今月十九日解状云、謹檢 案内、去寛仁三年十月七日
致件妨、仍愁申之日、被下 宣旨已了、其後于今無此妨、而今
年俄又制止捕留、高瀬舟上置、御網者結納、狩取十六人者如
犯人禁固也、是已背 宣旨也、預狩取等愁莫過欺者、望請 府
裁、被上奏事由、被召糺大江御厨司所爲、以何人供御備進哉、
令停止件江制止事、無闕怠備進供御者、府加覆審、所愁申有實、
仍勒在状、謹請 處分、

長元四年正月廿三日

佐従五位上兼紀伊守源朝臣

權佐従五位上平朝臣「雅康」

正三位行權中納言兼治部卿督藤原朝臣「経通」

（竹内理三編『平安遺文 古文書編（第二巻）』東京堂出版、

一九六五年、六九七頁）

この史料は、「高瀬舟」の実態を教えてください、注目

したい記事である。この文書は、右衛門府の解状で、「大江御厨」
という地で漁場を奪われた漁師たちの訴えを官に報告し、処分を要
請したものである。ここに記録される以外にも、この地の漁場争い
は何度も行われ、大江御厨側が漁の妨害をしていたようであるが、
漁師たちの愁訴が叶い、宣旨が下りその漁場権が認められることにな
った。にも関わらず、突然大江御厨側は、漁師たちの使っていた
「高瀬舟」を差し押さえ、まるで犯人のごとく禁固したという。つ
まり、「高瀬舟」は、この地での漁師たちの死活問題を左右する要
請の、彼らの実生活を露にする乗り物と看取できるとともに、供御
貢進の権威争いの一端を示していると言える。

このような記録から浮かび上がる「高瀬舟」の実態は、『和泉式
部日記』の女が用いた歌ことばを始め、他の歌とも明らかに乖離し
ており、それは「高瀬舟」が歌ことばとして独立したことを示して
いると言える。その証拠に、時代がやや下った歌学書の『袖中抄』
そして「八雲御抄」などが掲げる「高瀬舟」の説明は、川舟である
ことや、鵜飼船や橋船などとは違うものであるという注意に留まっ
ている。そして「高瀬舟」の実態を示す記事は、先に挙げた『三代
実録』の例が明記されるのみである。

ところが、再び『延喜式』の裏文書に注目すると、網野善彦氏が、
「狩取」と言われる漁師「十六人」が、「八艘」の「高瀬舟」を使っ
ていたということから、「高瀬舟」が「二人乗り」の船であったと
みて論を展開し、また、戸田芳美氏は、先にみた『倭名抄』の説明
も含め、「大江御厨」で使われたのは、この船の底が深く、「急流」
での航行に適しているためだとする。このような、実態に即して明
らかにされる「高瀬舟」は、「二人乗り」の船であり、なおかつ「急

流」の河川での行き来に適した船といえるのである。

するとつまり、物としての「高瀬舟」と歌ことばの「高瀬舟」は、確かにかけ離れているとしても、当時の「高瀬舟」が「二人乗り」で、「急流」に適した船であるという実体は、それが詠み込まれた歌と深く結びついているように思われるのである。そこでもう一度「高瀬舟」が詠み込まれた歌をみてみたい。

まず、『相模集』の例はどうだろう。あの歌で、夫は自身を「高瀬の小舟」に準えて、妻への皮肉をうったえていた。だが、たとえば別居状態にあり、冷めた夫婦仲であったとしても、「高瀬の小舟さほりあるまで」と詠出した夫の境地は、やはり妻である相模以外にはその船に乗せる相手などないことを示しているのではないか。すなわち、「高瀬舟」が「二人乗り」の船であり、待つている人のもとを訪れ、そして「急流」での航行に適した船であるならば、その船に乗って彼女のもとを訪れようと詠む公貧は、それによって、「みだれ」た夫婦関係を収めることができるのかもしれないし、自分を信じて待つていて欲しい願いを込めていたのかもしれない。それは、やや屈折した妻への情の示し方ではあるが、しかし、自身を「高瀬の小舟」に擬したそのこと自体がそれを物語つていよう。

次に、赤染衛門の場合はどうか。なぜ彼女は、「高瀬舟」の「かけ」に、待ち人の到来を期待したのであるう。その背景には、霞んだ景観の中でも「高瀬舟」を見逃さなかった、赤染衛門の心細さゆえの感受性があったからである。先に挙げた歌は、前の三五二番歌³⁹に続くものなのであるが、このときの彼女は、誰も訪ねてこないような侘しい「山里」に身を置いていた。だからこそ、大井川を眺めながら「高瀬舟」を発見した赤染衛門は、その船に乗った人が、もしか

したらこの山まで「急流」の川に棹をさして、自分を迎えに来てくれるのではないかと思ひ繼つたのではあるまいか。ひとりである彼女の目には、「二人乗り」の船である「高瀬舟」の姿が、何よりも心強く映つたのである。

『定頼集』では、女性の来訪を待つ親子の歌が収められていた。その女性は、彼らの前に「おそく」姿を現したことを思い出してみたい。そのため、定頼親子は彼女がなかなか来ない焦れつたさからあのような歌を詠んだ。そこで、定頼が「高瀬舟」を詠み込んだのは、それが石清水八幡宮という山頂までの急傾斜を上るのに適した歌語であったためだと思われる。またそれが、「二人乗り」の船という意を含んでいることも、もちろん考慮されていたことだろう。ならば定頼は、「高瀬舟」にその女性と「二人」で乗ろうとするも、待ちくたびれた徒労を表出していたのである。

そして『源氏物語』での薫と大君の贈答歌であるが、そこには「急流」の川を渡つて訪れる男と、それを見送る女の姿が描き出されていた。そのやりとりには、決して「二人」はともに「高瀬舟」には乗れない関係であることが示唆されており、悲運な恋の行く末の不安感をも物語世界に漂わせているといえよう。

このようにみてみると、「高瀬舟」の実体が、それぞれの歌の命を支えていることに気付く。おそらくそれは、『和泉式部日記』においても例外ではないだろう。むしろ女は、いち早くそれに注目し、「高瀬舟」こそが宮に最も伝えたい思いを届けてくれる歌ことばとして採択したのではないか。さらに言えば、「高瀬舟」は激流と表象されるような障害多きふたりの恋を貫くための、核心をつく歌ことばであったと思われるのである。

四、障害を越えゆく「高瀬舟」

では、「日記」の紅葉狩をめぐる場面の発端から振り返り、再び「高瀬舟」の贈答歌を検討したい。

(宮)「この頃の山の紅葉は、いかにをかしからん。いざ給へ、見ん」とのたまへば、(女)「いとよく侍るなり」と聞こえて、その日になりて、(女)「今日は物忌」と聞こえてとどまりたれば、(宮)「あな口惜し。これ過ぐしてはかならず」とあるに、その夜の時雨、つねよりも木々の木の葉残りありげもなく聞こゆるに、目をさまして、(女)「風の前なる」などひとりごちて、みな散りぬらんかし、昨日見で、と口惜しう思ひ明かして、つとめて、宮より

神無月世にふりにたる時雨とや今日のながめはわかずふるらん

さては口惜しくこそ」とのたまはせたり。

〔和泉式部日記〕六一頁

冒頭でも述べた通り、ここには紅葉狩へ誘う宮と、それに従順に応える女の姿が窺える。このようなふたりの様相は、白昼に堂々と世間に姿を現すことで、真つ向からその非難を浴びようとする、宮邸入りへの覚悟さえ示している。しかし、女の「物忌」で紅葉狩はたちまち不可能となる。したがって、女の「物忌」が明けるまでの間、心移ろいやすい宮の発意を留め、いかにして葉が散る前に紅葉狩を実現できるかということが問題であった。

宮は、それが過ぎたら「かならず」と言い残したが、女の耳には「その夜の時雨」の音が、「つねよりも木々の木の葉残りありげもな

く」響き、「口惜し」さのあまり眠れず、「風の前なる」などとひとり眩き、無念をひたすら嘯み締めて夜を明かした。そして翌朝宮からの文を受け取るが、そこには嘆きの歌が綴られるのみなのであった。それに対して、女も同じように嘆いてみせるものの、話題を転じて応えるのである。

時雨かもなににぬれたる袂ぞとさだめかねてぞ我もながむる

とて、「まことや、

紅葉葉は夜半の時雨にあらじかし昨日山べを見たらましかば」

(六二頁)

宮の涙を「さだめかね」とし、濡れた自身の「袂」を詠み込んで、今降っている雨は自分の涙だとうったえる。だが女は、「まことや」と、すかさず機転をきかせて話題を替え、彼に紅葉狩が叶わなかった「口惜しさ」を伝えることを忘れなかった。そして、もう一度紅葉狩へと自分を誘うように仕向けたのである。それを受け取るやいなや、宮は女に歌を寄越すのであった。

(宮) そよそよなどて山べを見ざりけん今朝は悔ゆれどなにかひなし

とて、端に、

あらじとは思ふものから紅葉葉の散りや残れるいざ行ききて見ん

とのたまはせれば、

(女) 「うつろはぬ常磐の山も紅葉せばいざかし行きてとふともみん

ふかくなることにぞ侍らんかし」

(六二頁)

昨日「山べ」を見に行かなかつたために、「今朝」の後悔は「かひ」がないとするも、その歌をしたためた紙の「端」には、残っているかもしれない紅葉を「いざ行きて見ん」と詠み、宮は女を紅葉狩へと誘ったのである。

それを女が見過ごすはずがなかった。女は、「常磐の山」の「紅葉」というあり得ない光景を詠むことで、反対に宮との紅葉狩を必ず実現させようという思いを託した。さらに一言、「ふかくなることにぞ侍らんかし」と添え、それをもって宮に念を押ししたのである。

このような経緯で、「高瀬舟」の贈答歌を収める当該場面に至るのだが、再び紅葉狩へ赴こうとする気運が高まる中、なにゆえふたりは、今更あのような焦らし合いの詠歌を贈ったのであろうか。もちろん宮にしてみれば、女にしてやられてしまったという戸惑いがあった。だが、そういう困惑は、この恋にかぎってはすでにお手の物であった。むしろ、突かれたところのない感性が刺激されるといった、ある種の小気味好さを覚えていたといつてよい。そのため、女の「高瀬舟」の詠歌につながる「ひと日、おはしましたりしに、(中略)を思し出でて」の箇所は、日記の記者が、女の見地から、時間を遡らせて宮の戸惑いを描き出そうとして生じた文脈の纏れと言えらる。実は、こうした現象にこそ、ふたりにしか解し得ない微妙な恋の駆け引きが表れているのである。

女は、「高瀬舟」を漕ぎ出して欲しいとうたい、自分を乗せて宮とともに「二人」で紅葉狩に出かけることを願う。そのために障害となるものは除いたとし、さらに「高瀬舟」の語に寄せて、「二人」で世間の非難を乗り越えてゆこうという主張もしてみせた。それに對して、宮の返歌は「山べにも」というものであった。山には「車」

で行くものだから、「高瀬舟」などどうやって寄せるのかと、やや女の心を反らしたかのようなうたいぶりをする。そのことの説明が、女の歌の前にあると考えていいだろう。つまり、宮が先日「おはしましたりし」時に、女が「さはることありて聞こえさせぬぞ」と申し上げた、そのことを今、宮は思い出して、女に返歌をしているのである。

そして、その前に添えられた「思し忘れたるにや」は、宮が女に、紅葉狩へ行く乗り物と「高瀬舟」を混同し、その両者の意味を忘れてたわけではないですね、と承知の上であえてはじめに問いかけて、さらにそれを否定する女の声を呼び込んでいると捉えるのが穏当である。したがって、地の文ではなく、宮の返事の中に位置付けられねばならず、本文に示したように、「」の中を含めて考えるべきであろう。

そうした宮の歌に對して、女は再び歌を返す。それが「紅葉葉の」の歌であった。女は物名隠しの手法で見事に「車」の語を織り込み、なおかつ「高瀬舟」を用い、「恋い焦がれる」という思いを全面にした。そして、「車」で見に行くと散ってしまう紅葉だけれども、「高瀬舟」は「急流」に適した船であるために、その前に行き行くことを可能にする歌ことばであることを示した。紅葉狩を立ち消えにするまいと思いを募らせる女は、今すぐにでも「高瀬舟」を漕ぎ出ださずにはいられず、そのために宮の訪れを待ち焦がれていると応えたのである。この歌によって宮は訪れることになった。よって、「紅葉葉の」の歌を受ける「とて」は、句点で句切つて解する。

『日記』は、この贈答歌の背景の詳細を記さず、女の歌を受け取った「その日」に宮が訪れたとすることで、自分を待ち、「二人」で

障害を乗り越えたいと願う恋人の意を酌む男を登場させたのであった。宮の「山べにも」の歌にある、「いかががよすべき」の「いかが」とは、女に「高瀬舟」という符丁の意の確認を望んだ機微がみえる。それに対して女は、「高瀬の舟」と、今度は「高瀬舟」を宮の詠んだ通りに詠みかえ、再度それがふたりの乗るべき船であることを示し、宮を待っていることを伝えたのである。

この「たかせぶね」という、わずか五文字の歌ことばには、『和泉式部日記』が描き出そうとする恋のあり様そのものが象られている。ふたりは「高瀬舟」を詠み合うことで、この恋の立ち向かうべき思いを印していたのである。

注

- (1) 応永本、寛元本、家集(二三三番歌)においては宮の「物忌」とされ、当該場面の発端の相違が見受けられる。
- (2) 小論で用いる『和泉式部日記』の本文は、宮内庁書陵部蔵伝三条西実隆筆『和泉式部日記』を底本とし、私により校訂した。なお便宜を図るため、近藤みゆき訳注本(角川ソフィア文庫、二〇〇三年)の当該頁数を付した。本文に施した囲みや傍線等は、すべて論者によるものである。
- (3) 諸注釈書および、佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全評釈』(東寶書房、一九五九年)の当該歌の注記による。
- (4) 遠藤嘉基校注『和泉式部日記』(日本古典文学大系)「補注一〇九」(岩波書店、一九五七年)、円地文子・鈴木一雄「考説(三五)「高瀬舟」の贈答歌にまつわる疑問について」(『全講和泉式部日記』至文堂、一九六五年)、岩佐美代子「和泉式部日記読解考」(『國語國文』第五十五卷第四号—六二〇号)、一九八六年三月、山

下太郎「和泉日記の紅葉章段―「手枕の袖」の変奏―」(『文学史研究』第四十号、一九九九年十二月)、菅原領子「『和泉式部日記』紅葉狩りの一段について」(『國語國文』第七十卷第六号—八〇二号—二〇〇一年六月)等。

(5) 小町谷照彦「和泉式部日記の方法―その虚構性を通して―」(『國文學 解釈と教材の研究』第十四卷第六号、學燈社、一九六九年五月)

(6) 佐藤和喜「和泉式部日記の表現」(『平安和歌文学表現論』有精堂、一九九三年)

(7) 大きく違いが見受けられるものを挙げると、例えば、遠藤嘉基校注本(前掲注6)、野村精一校注『和泉式部日記・和泉式部集』(新潮日本古典集成)(新潮社、一九八一年)、藤岡忠美校注訳『和泉式部日記』(新編日本古典文学全集)(小学館、一九九四年)。

(8) 論者は、近藤みゆき訳注本(前掲注2)の見解に従って解した。遠藤嘉基校注本(前掲注4)、鈴木一雄氏(前掲注4)等。

(9) 菅原領子氏(前掲注4)論文。

(10) したがって、童の会話によって女の「物忌」が明けたことを知った宮が、女の「高瀬舟」の歌を受けて見せた反応が、傍線部「おほし忘れたるにや」であった。すなわち宮は、後でも触れる人麻呂の、「湊入りの蘆分け小舟さはり多みわが思ふ君に逢わぬ頃かな」という歌を念頭に、女はその古歌を「お忘れになったのですか」と、彼女の常識をやや問うているのである。そこで、「山べにも」の歌を詠むという流れである。ただし、ここには人麻呂の

「湊入りの」の歌の一節がどこにも見受けられないのであるが、野村氏(前掲注7)の解釈に従えば、人麻呂の歌は、女の「高瀬舟」の歌によって当然想起されるものとして解するということになる。ほぼ同時期と思われる例が、『赤染衛門集』の三五三番歌に見受けられる。

大井川に舟の漕ぎ渡るを見て

雨やまぬかげをば渡る高瀬舟をちかた人の来るかとぞ待つ
(なお、この歌は後の節で考察を試みているので、そちらを参照
されたい。)

(12) 伊藤博『和泉式部日記』の歌ことば(「大妻国文」第二十号、
一九八九年三月)、中嶋尚『和泉式部日記全注釈』(笠間書院、
二〇〇二年)等。なお、中嶋氏は「車」と「舟」の連想の背景に、
漢詩の影響を指摘する。

(13) 全八例(「元真集」一一二)／「一条撰政御集」四三・四四・一七四
／「齋宮女御集」一五三／「元輔集」六六／「成尋阿闍梨母集」
一八／「周防内侍集」七六。

また、「千類集」(九七・雜十三首)では、「蘆」は詠み込まれて
いないが、「浅瀬」になすむ「小舟」を用い、「浅瀬こぐ小舟」小
舟ならしもさはりおほみ思ふ心をやるよしもなみ」と、障害が多
くて、相手を「思ふ心」をどのようにしたらいいのかという手段
のなさをうったえた歌がある(以下、小論で扱う歌はすべて『新
編国歌大観』により、一部私に改めて使用する)。

(14) 『一条撰政御集』四三・四四・一七四

おなじ女に
わがごとやわびしかるらんさはりおほみ蘆間分けつる舟の
心地は
かへり
わがためにさはれる舟の蘆間分けいかなるかたにとまらざ
りけむ

(15) 『成尋阿闍梨母集』一八

心地は
我がごとやかなしかるらんさはりおほみ蘆間分けゆく舟の
入人、津の国といふ所におはしぬらん、といへば
蘆間行く舟もさはらずこぎでぬときけば難波のうらめしき
かな

(16) 『齋宮女御集』一五三

おなじ宮より、あまがつを、これをかたみに見たまへ
とてたてまつり給ひけるを、かへしたまふとて、もな
どきせたまひて、そのもにあしでにて

(17) 以上を含め、「蘆」と「舟」を詠み込んだ歌の例は平安期までに
全一二六例ある(『新編国歌大観』による)。

(18) 木村正中『和泉式部日記の歌ことば』「高瀬舟」をめぐって(上
村悦子編『王朝日記の新研究』笠間書院、一九九五年)
『和泉式部集』二八五・三七八・六七五・一〇八。注20を参照。

(19) 「舟」を詠んだ歌は、家集に全十七例ある(八四・二六九(詞書)・
二八五・三六八(詞書)・四一一(高瀬舟)・四三三・六七三・六七五(詞
書)・六七六・六七九(詞書)・七六三・八四四・八八四・一一〇八・
一一四二(詞書)・二二一・一四四六)。以下四首は、「蘆」を詠み
込んだ歌。

285 難波濁みぎはの蘆にたつさはる舟とはなしにある我が身か
な

378 難波濁入江の蘆にたちさはる舟とはしになる我が身かな
蘆多く積み上げたる舟にいきあひて

675 蘆分ぐる程に来にけり立つ浪の音に聞きてしこや難波濁
同じ人、障る事ありて、程経る由をいひたれば

1108 難波濁蘆の折り葉を押しわけて漕ぎ離れ行く舟とこそ見れ
注13から15に挙げた歌と比較してみても、和泉式部の「蘆」と
「舟」を詠み込んだ歌は、やや特殊であることがわかる。例えば、
『一条撰政御集』をみると、「心地」の語が詠み込まれていること
には目を引くが、やはり他の詠歌と同様、障害の多い困難な状況
での哀愁を漂わせる歌である。しかし、和泉式部の詠歌はと言う
と、訪れが途絶える男への皮肉や、「我が身」の上を象徴する際
の歌語として「蘆」や「舟」が用いられており、同時代のものと
の位相が窺えよう。その他にも、特に和泉式部の場合、「舟」を

用いた歌には強いこだわりが看取でき、同じく家集の二六九番歌をみると、

観身岸額離根草、論命江頭不繫舟

みる程は夢も頼まるはかなきはあるをあるとて過ぐすなり
けり

と、漢詩を典拠にし、無常を嘯みしめて生きる「我が身」や、そうした世の中の居場所のなさ、そして根無し草的な身の上の浮遊感を詠出している（「根無し草」の語は、久保木寿子「帥宮哀傷歌群の世界」和歌文学会編『論集 和泉式部』笠間書院、一九八八年を参照）。ならば、「高瀬舟」に対しても、式部の相違な思い入れがあつて詠出した歌ことばであり、それを宮へ贈つたということは、疑いようがないものと考えられる。

(21) 「高瀬舟」を詠み込んだ例は、全七十例。「高瀬」の語は、全

二九七例（『新編国歌大観』による）。

(22) 「高瀬」を詠み込んだ例は、全七十例。「高瀬」の語は、全

二九七例（『新編国歌大観』による）。

この歌は、「高瀬舟」の語が詠み込まれているわけではないが、「高瀬」という語が、差し支えの多いものを喚起する例として注目した。

(23) さしかへりゆく空もなし 高瀬舟 蘆間の岸にこころとまりて

〔大納言経信集〕二七七・左馬頭

高瀬舟 棹のをとにぞしられける蘆間の水ひとへしにけり

〔金葉集〕冬・二七一・藤原降経

つながねど流れも行かず 高瀬舟 結ぶ水のとけぬかぎりは

〔金葉集〕冬・二九六・三宮

(24) 「高瀬の淀」という歌枕で知られるように、「高瀬」は、「菰」などの雑草が群生する地が連想される歌ことばであることも念頭に置く必要があるかと思われる。

(25) 武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ『相模集全評釈』（風間書房、一九九一年）

(26) 長月の 月のさかりになりゆけば 心もそらに うかれつつ 野

にも山にも ゆき見れど なほしあかねば 高瀬舟 棹のさすがに 思へども やそうぢ人に 道を問ひ 見なれて後に漕ぎゆけば 天の川まで なりにけり（以下略）

(27) つなでなはこころしてひけ 高瀬舟 岸の山吹にほふさかりぞ

〔大納言経信集〕「旅情」・二七四

(28) さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫

〔雅兼卿集〕「河辺款冬」・二四

(29) 中野幸一編『浮木（源氏物語古註釈叢刊第五巻）』

〔古今集〕恋・六八九・読み人知らず

(30) 「高瀬舟といふは此の高瀬をこさんれうに舟ノ袖をあさくひらに作りたるもの也（二〇二頁）」の箇所、明記されている（本文の引用は、中野幸一編『岷江入楚（源氏物語古註釈叢刊第九巻）』武蔵野書院、二〇〇〇年）。

(31) 「萬水一露」には、「舟の心をもたせてたかせさすほどはいへり。姫君の心をさぞと思ふゆへに薫の袖のぬれたると儀也（二九七頁）」の指摘があり、特に「舟の心」という語に着目した（本文の引用は、伊井春樹編『萬水一露（第四巻）』桜楓社、一九九一年。句点・濁点は、論者による）。

(32) 「高瀬は舟也。あやしき舟どもに、柴かりつみとある詞をうけておもふべし（三三九頁）」という注記が掲げられており、「高瀬舟」の詠出は、薫が実見する柴舟から連想されたものと推測されている（本文の引用は、北村季吟著・有川武彦校訂『源氏物語湖月抄（下）増注』講談社、一九九二年）。

(33) 舩 釈名云艇小而深者曰舩

〔渠谷反字亦作 今案和名太加世世俗用高瀬舟〕

(34) 本文の引用は、正岡敦夫編『倭名類聚鈔』（風間書房、一九六〇年）により、割注は（へ）に示した

太田静六「神泉苑の研究」（『寝殿造の研究』吉川弘文館、

一九八七年)

(35) 第十二「いづておね」の項

(36) 『俊頼髓脳』には、「高瀬船、釣舟などはつねのことなれば申さず」と、立項すらされないほど巷にあふれた船であったことがわかる(本文の引用は、『日本歌学大系(第一巻)』一八七頁による)。

(37) 網野善彦「海民の諸身分とその様相」(『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店、一九八四年)

(38) 戸田芳美「御厨と在地領主」(『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年)。

(39) 雨ふりもの心ほそかりしに

さらでだにとふ人もなき山里に雨にやことをつてんとすらん

(40) 三田村雅子『和泉式部日記』(ほるぷ出版、一九八七年)、山下太郎氏(前掲注4)論文。

(41) 鈴木日出男氏は、両者が「散り終った紅葉にこだわりつけ」、それがいつそう無常の終末感を漂わせ、心を寄り添わせたい願いを込めていると言及する(鈴木日出男『和泉式部日記』の方法と和歌『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年)。

(42) この「ふかく」には諸説あり、「不覚」とみる説もあるが、小論では近藤氏(前掲注2)の「深く」という見解に従いたい。

(43) 『日記』の六月頃に交わされた「小舟」を用いた贈答歌

(宮) よしやよし今はうらみ磯に出でてこぎ離れ行くあまの小舟
を

(女) 袖のうらにただわがやくとしほたれて舟流したるあまと
こそなれ

(二三三頁)

当該場面での「高瀬舟」の贈答歌は、こうしたすれ違いを経て生み出されたものだったのである。

付記

小論は、第一〇二回全国大学国語国文学会大会(平成二二年度冬季大会 於宮城学院女子大学)での口頭発表をもとに、書いたものです。拙論へのご助言、ご叱正を賜った先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。